

● 平山洋介が選ぶこの一冊

稲葉 剛 著 ハウジング・プア 「住まいの貧困」と向きあう



発行/2009年10月24日
出版社/山吹書店
定 価/1800円+税

貧困者支援運動の最前線での活動経験を踏まえ、「ハウジング・プア」という言葉・概念を最初に打ち出した著者が、それを「貧困ゆえに居住権が侵害されやすい環境で起居せざるをえない状態」と定義し、考察したものが本書である。

派遣切りとか、ネットカフェ難民とか、追い出し屋とか、マスメディアを賑わす「時事問題」の「描写」に終わるのではなく、「ハウジング・プア」拡大のメカニズムを丁寧に「説明」し、その要因を政策・制度のあり方に関連づけた点に、本書の価値があると思う。貧困現場の悲惨さを描き、訴えることは、社会関心を集めるうえで大切であるとしても、原因不明の現象には対処しようがないし、政策・制度論を抜きにした立論は展望を持ちようがない。運動家の一部の人は、貧困の惨状に触れているがゆえに、声高な文章を書く。しかし、著者は普通の言葉づかいで、冷静に議論を運ぶ。そこには、落ち着いた書き方であるがゆえの説得力がある。

本書が説くように、貧困の核には住む場所の不安定さがある。住まいを失ったままでは、暮らしの立て直しは不可能である。居住安定の欠落は、社会保障の負担を増やすだけではなく、その効果を削減する。政府も、市民も、景気さえ回復すれば、貧困が自動的に消えるかのように考えている。この間違った見方は、日本全体が景気主義に陥っていることを表している。重要なことは、経済の調子の良し悪しにかかわらず、暮らしの安定を支える政策・制度を織り上げる仕事である。そして、その中心に居住権の保障を据える必要がある。住まいさえ安定すれば、所得が低くても生きていける。住宅の大切さに焦点を合わせた本書が広く読まれてほしい。

ひらやまようすけ

● 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授、住宅・都市計画専攻。著書に『住宅政策のどこが問題か』（光文社新書）、『欧米の住宅政策』（共著、ミネルヴァ書房）、『東京の果てに』（NTT出版）など多数。